

情緒障害特殊学級における自閉症児の指導に関する事例的考察

— 家庭から特殊学級にスムーズに移行するために —

安藤仁史（岡崎市立美合小学校） ・ 都築繁幸（愛知教育大学）

I. はじめに

自閉症児を持つ保護者の多くは、我が子が事故に遭わないだろうか、人に迷惑をかけないだろうかと心配するために精神的に疲れ、ストレスがたまる傾向にある。学齢期が近づくと保護者は、我が子に一番合う教育の場はどこだろうかと迷いと不安を抱えながら学校を決める。

小学校に入学した自閉症児は、新しい環境に戸惑い、混乱の中で学校生活をスタートさせる。多動、こだわり、問題行動など、周りの者が気になる症状が強く表れるのはこの時期である。

ここで取り上げる児童Aは、1年生として情緒障害特殊学級に入学してきた児童であり、言葉によるコミュニケーションは何とか可能であるが、多動であり、衝動的に行動しやすく、人をたたくことが当面の問題となっている。

児童Aの保護者は、本児の実態を正しく認識しており、その上で将来、社会自立した生活ができるようになることを願い、特殊学級への入級を決め、児童Aの特性に合った支援を期待している。また、通常学級の児童との関わりや、そこでの学びも期待している。

本報告では、保護者からの期待を受け、入級後からできるだけスムーズに児童Aを学校生活に適應させ、本児が生き生きと主体的に活動できるようにすることをめざして実践した経過を述べる。

II. 指導方針と内容

(1) 基本的な考え

指導にあたり、児童Aの能力と興味、自閉症としての特性に合った支援がなされれば、本児は学校生活に適應し、与えられた条件の中で自ら判断し、行動するようになるだろう、と考えた。

また、家庭と学校が連携し、歩調を合わせた支援がうまく機能すれば、児童Aへの教育的効果が高めることができると考えた。

具体的には、以下のことに留意して指導にあたった。

- ・学校でも家でも、自閉症児が落ち着いた生活を送れるように支援する。
- ・自閉症児の特性に合った環境、教材、活動を用意し、基礎的な学力を身につけられるようにし、興味の対象を広げ、将来の可能性を高める。
- ・日常生活のさまざまな場面における適切な行動のしかたを具体的に教え、使えるようにする。
- ・自分の要求や希望を世間に認められる方法で表現できるように支援する。
- ・不適切な行動の原因を追及し、そうした行動を軽減する。
- ・保護者と連携して育てるという関係を通じて、保護者の不安や負担を軽減する。
- ・周りの人々に自閉症児に対する理解を促し、協力を得られるようにする。

一般に多動や必要以上のこだわりなど、不適切な行動が示される時の自閉症児は、混乱して不安な状態にあるといわれる。小学校に入学したばかりの児童Aについても同様のことがいえると考え、まずは本児の混乱を軽減するための環境を整える必要があると考えた。学校生活で児童Aに混乱を生じさせるのは、次のような状況のときではないかと考えた。

【自閉症児が混乱しやすいこと】

- ▲ことばだけで伝えられること。（※その子のことばの理解度にもよる。）
- ▲思いつきで指示を出したり、急に予定を変更されること。
- ▲大勢の人間が不規則に動き回ったり話したりする環境の中に置かれること。
- ▲具体的な目標が提示されないこと。（※「何時までこの作業をおこなう」は×）
- ▲自分で工夫したり、状況に応じて判断したり行動したりすることを要求されること。
- ▲その子の苦手な、特定の音や歌が聞こえること。
- ▲その子に影響力のある人（保護者や教師）の言うことや要求が、人によって違うこと。

このことを踏まえ、児童Aの混乱を避け、指導者の意図や情報をわかりやすく伝えるには、児童Aとのあらゆるやりとりに関して次のように留意した。

【自閉症児にとってわかりやすい方法】

◎目から多くの情報を得る。

- ・絵や文字は、なるべく輪郭がはっきりしていること。
- ・はっきりとした配色や配置であること。
- ・絵も字もなるべくシンプルな表現で、注目すべき部分が明確であること。
- ・その子の発達に合った絵、写真、文字等の手法が用いられていること。

◎目標や予定がはっきりしていること。

- ・5W1Hが、あらかじめ明らかにされること。
- ・課題の始まり、終わり、量(数)が明快であること。
- ・手順がわかりやすいこと(順序数がわかる子は、数字が使っているとわかりやすい)

◎同じ手順、同じ方法でおこなうことが許される。

- ・いつも同じパターンでおこなえばよいということ。

(2) 児童Aへの支援の方法

本児は、「～だね。」と共感を求めたり、「～するの(したい)」と意思表示ができる。ひらがなは一部の字が読める。「1、2、3…」と数は言うが、一対一対応ができておらず、数えることはできない。赤・青、黄の信号の絵が好きで、同じ絵を繰り返し書く。しかも信号が点灯しているときとそうでないときを分けて書く。色には敏感である。人をたたくのは、相手に振り向いてほしいときや、抗議をするときなど、何かを訴えたいような時に生ずる。このことから児童Aは自分の思いを表現したいという気持ちと能動的に相手に働きかけたいという気持ちが強いことがわかる。しかしながら、表現の方法が不適切だったり、知識が不足していることから自分の思いがうまく伝わらないもどかしさを感じているのではないかと考えた。

そこで自閉症児特有の視覚優位の特性を活かした教材を準備し、情報を提示しようとした。また変化を嫌う本児の特性に合わせ、毎日行う決まった活動はパターン化し、自主的に動けるようになるまで、繰り返し練習するのがよいと考えた。

児童Aの支援には、関係者や保護者の協力が欠かせない。児童Aの混乱が「変化」にあると仮定すれば、児童Aへのさまざまな支援は、関係者の意図を統一させた方が効果的であろう。

以上のことを踏まえて、1年生の児童Aに以下の方法で支援を行うこととし、これらの方法を独立して行うのではなく、それぞれが同時期につながりをもって児童Aの発達を支援するように配慮した。

児童Aへの支援(方針および具体的な支援の方法)

方針

具体的な方法

- | | |
|--|---|
| <p>A. 関係者の連携(保護者・担任・補助者ほか) ……</p> <p>B. 予定の提示と管理 ……</p> <p>C. 見てわかりやすい教材と環境 ……</p> <p>D. 児童Aの好みを取り入れた活動 ……</p> <p>E. パターン化した活動の繰り返し ……</p> | <p>個別の指導計画を活用する。
打ち合わせで情報を把握する。</p> <p>スケジュール表を用いる。</p> <p>国語・算数・生活単元などの教材の提示のしかたを工夫する。</p> <p>国語・算数・生活単元学習などの学習に、児童Aの要望を生かす。</p> <p>朝の着替えとかけ足、給食当番、清掃活動、係活動を習慣化する。</p> |
|--|---|

めざす児童 A の姿

- ◎社会（学校・日常生活）のルールに適応できる子。
 - ・自分が置かれた状況を理解し、ルールに従って行動できる。
 - ・家族や友人と、楽しい時間を共有することができる。
 - ・他人に迷惑をかけない。（＝たたかない。）
- ◎主体的な生活ができる子
 - ・自分のできることは、自らやってみようとする。

保護者の思い

- ◎わが子が成長したという満足感
- ◎わが子の教育への関心の高まり
- ◎将来への期待感
- ◎「次」への意欲

- ◎置かれた状況や場によって、してもいいことといけないことがわかる。
- ◎繰り返し練習したことに自信をもつ。
- ◎慣れたことは自分で判断してやってもいいんだという確信を持ち、実際に自分からやってみようとする。

- ◎自分の教室と友達・担任に慣れ、リラックスできるようになる。
- ◎毎日の生活（学校・新しい家）に慣れる。
- ◎毎日繰り返しておこなう活動は習慣化し、自分で進められるようになる。
- ◎自分の予定を把握して行動できるようになる。

児童 A に合った教材や環境作り

- 情報の整理と提示のしかたの工夫（視覚優位を生かした支援）
- 児童 A の興味・関心を生かす。
- 活動の場所の工夫
- 交流の支援
- 校内の連絡・調整・支援の依頼

保護者との連携

- 同じ方針・同じ対応
- 連絡を密にする。
- 根気よく付き合う。
- 本人の気持ちに添う。

児童 A の実態

- ▲自閉症
- ▲「A、きかんしゃ、のる？」など、3単語を使って、ことばによるコミュニケーションがとれる。表現は必ずしも適切でない。大人には頻繁に話しかけ、やりたいこと、やりたくないことなど意思表示ができる。
- ▲衝動的で、後先考えずに手を出す。
- ▲よく人をたたく。
- ▲多動傾向がある。

保護者のねがい

- 乱暴なために友達から敬遠されてしまうところを改善したい。
- 人に向かって適切な意思表示ができるようになってほしい。
- 物事の目的を理解し、最後まで取り組んで達成感を味わえるようになってほしい。
- 人と競争したり楽しんだりする気持ちを持ってほしい。

個別の指導計画

担任の役割

- ▶学校でも家でも、自閉症児が落ち着いた生活を送れるように支援する。
- ▶自閉症児の特性に合った環境、教材、活動を用意し、基礎的な学力を身につけられるようにするとともに興味の世界を広げ、将来の可能性を高めるようにする。
- ▶社会のルールに適応できるように、具体的な場面での行動のしかたを示し、実際に使えるようにする。
- ▶自分の要求や希望を、皆に認められる形で表現できるように支援する。
- ▶不適応行動の原因を追究し、そうした行動を軽減する。
- ▶保護者と連携して育てていくという関係をととして、保護者の不安や負担を少しでも軽減できるように努める。
- ▶学校や地域の人々にも自閉症児についての理解を促し、協力を得られるようにする。

Ⅲ. 指導の実際

(1) 1学期：ルールに従う姿勢を育てたい。

① 保護者との連携と個別の指導計画

保護者との連携の基本は『個別の指導計画』である。個別の指導計画の作成のために保護者に児童Aがこの1年でできるようになってほしい項目(=願い)をあげてもらった。

「学習」面では、各教科・領域からそれぞれ2項目まで、「生活」面と「社会生活や人との関係に関する事」からは、それぞれ3項目まであげてもらった。児童Aの保護者からは、たとえば、国語では「ひらがなが集まって文字ができていることに気づき、興味を持ってもらいたい。」が出され、算数では「物を数えられるようになってほしい。」等の願いが出された。願いをもとに1年間と各学期の具体的な達成目標を立て、個別の指導計画を作成した。

個別の指導計画には、目標を達成するための「手立て」や「留意点」を記した。更に保護者と担任がこの計画を一部ずつ手元に置いて、常に確認できるようにした。

② 交流の時間と大人の動き

児童Aへの支援を成立させるために保護者と担任の他に校内のすべての職員と通常学級の児童・保護者に協力を依頼した。児童Aが通う相談施設や治療教育施設との連携も行ったが、本稿では学校内の連携のみを述べる。

入学式当日、協力学級(=交流に通う学級)では、特殊学級担任から協力学級の子どもや保護者たちに向けて、児童Aを紹介しながら、障害の特徴や留意点をかみくだいて説明した。

校内では、もう一人の特殊学級の担任、協力学級の担任および交流学習に行くときに付き添う教員補助者との連携が欠かせないためにこの3人とは毎朝の職員打ち合わせで予定を確認した。協力学級の週の予定は提示されるが、急な変更もあるので、必ず当日の予定を再確認し、特殊学級の一日の予定と関係する大人側の動きを決めた。これは児童Aの予定に急な変更を加えないためにも必要なことである。児童Aは、音楽、図工、体育の授業を協力学級で受けている。授業が終わるたびに教員補助者は特殊学級担任に報告することとした。児童Aにとって交流学習は、刺激と不安の多い時間であろう。本児の不安を低減し、思いを受け止めるために信頼される大人の目が行き届く体制を整えた。

4、5月はすぐに教室に戻って来てしまった児童Aだが、徐々に戻ってくる回数が減り、1学期を終える頃には、協力学級の授業に最後まで参加して来るようになった。

③ 予定表の利用

児童Aには、「自分がこれから何をしたらいいのかわからない」という不安があり、それが多動やたたく行為に結びついていると考えられた。これを解消するために保護者と相談し、家庭ではカレンダーにシールをはって予定を知らせることにした。その結果、5月下旬の運動会を児童Aは楽しみに待っていたということである。学校では、教室の出入りに児童A専用の予定表を掲示した。予定表は、①1日の学校生活の予定がひと目でわかる、②時間の『経過』がわかる、③予定を変更しない(=「予定表」への児童Aの信頼を得るため)ことを配慮した。また1枚のカードには1つの情報(予定)のみ載せた。ひらがなを覚えていない児童Aのために予定カードは写真と絵で表現した。

カードは、活動を終わったらはずして箱に入れるというルールを決め、児童Aとともに練習を繰り返した。ところが児童Aは予定表にあまり興味を示さず、1学期は特殊学級担任の指示どおりにやっているだけといった様子だった。

家庭ではカレンダーに予定を表すシールをはっていたが、手応えはあるということであった。これをさらに徹底するために、連絡帳の6/29から7/18のやりとりに示したように夏休み中も学校の予定表とよく似た予定表を作り、家庭で試すことになった。

④ 概念形成から始める国語と算数の学習

個別の指導計画の国語と算数の年間目標に「ひらがな46音(清音)と2、3単語の文が読めるようにする」、「10までの物の数が数えられるようにする。」がある。

4月では、本児は、例えば、「みかん」の単語は読めたが、「み」「か」「ん」の一文字ずつは読めなかった。一文字が一音を表すという認識があいまいであることもわかった。そこで本児が知っている単語を使い、一音ずつにばらしたり組み立てたりする学習を始めた。ひらがなブロックを使った練習は、まず二音節の「ねこ」の写真を見て、「ねこ」を何度も繰り返して練習した結果、本児は正しい語を組み立てられるようになった。書く練習は、なぞり書きから始めた。線と線が交わると、どちらへ筆を進めるかがわからなかったために、/、-、=、>など、交わる部分がない単純な線をなぞる練習から始めた。慣れるにしたがい交わりの部分を1か所(+、×

など)、2か所(≠、♀など)と増やし、形も複雑にして難易度を高くしていった。またカラフルな色づかいをして、児童Aの関心を高めるようにした。児童Aはなぞり書きを好み、よく集中した。5月下旬からは、「し」、「の」など一画のひらがなの練習も始め、少しずつ画数の多いものへと移行していった。児童Aは家でも学校と同じように母親にノートに記号やひらがなを書いてもらって、書くのを楽しんだ。算数は、児童の意識の中で数と数字を一致させるために数を書いたマスにシールをはる学習から始めた。次に3つのボールをバケツに投げこみ、入った数だけシールをもらってノートにはる学習をおこなった。この学習は、①ボールを投げる、②数を数え、同じ数字のカードを拾って見せる、④数字カードと同じ数だけシールを拾ってノートにはるという手順でおこなった。ノートにはマス目が書いてあり、これをシールで埋めていった。

児童Aはこの学習を好んで取り組んだ。慣れたところでノートのマス目を双六のように並べてスタートとゴールを書いた。児童Aはいつそうこの学習を好むようになり、算数の時間になると、「シールやる？」と確かめるようになった。

⑤ 繰り返して覚える日常の活動

毎日行う給食当番やそうじは、手順を一つに統一して、徹底的に同じ方法で繰り返し練習した。児童Aの給食と掃除は、自分の教室でもう一人の友達と担任の3人だけでおこなうので、仕事の内容も単純化しやすい。給食当番では、児童Aは数がはっきりしている牛乳係とした。給食の時間になると、①エプロン、マスク、帽子を身につける、②手を洗う、③消毒液のスプレーを担任に「かけてください」と頼む、④級友、担任と一緒に配膳室に移動する、⑤おばさんにあいさつをして牛乳を受け取る、⑥教室に戻って配る、⑦エプロンを畳んでしまう、という動きを繰り返し練習した。児童Aは手順どおり、忠実に役割をこなした。余分な動きもなく、自分の仕事に集中できた。

そうじは、児童Aは机を拭く係とした。仕事の手順を直列式に組み立てるために拭く場所には番号シールをはり、手順を示したカードを用意した。児童Aが覚えるまで手順通り忠実に練習を繰り返した。これ以降、担任がひとつひとつ手順を指示する必要はなくなった。

(2) 2学期：1学期の学習の定着をめざしたい。

① 予定表へのこだわり

1学期は教室の予定表にあまり関心を示さなかった児童Aが、2学期が始まると急に気にするようになった。カードは活動後に抜いて箱に入れるのをやめて、裏返すルールにしたところ、自分で裏返すようになった。それからは、登校するとまず予定表を確認するようになった。家でもカレンダーにシールをはり、予定をあらかじめ児童Aに伝えることを心がけてもらった。連絡帳の10/24や12/1にあるように本児は家でも学校でも自分に関わる予定を気にしているようだ。

② 国語と算数へのこだわりと定着

5月下旬では、読めるひらがなが25文字前後だったが、10月には40字近くになった。「め」、「ぬ」などの読みまちがいが残る。読める字が増えたのに伴い、連絡帳の11/11の報告に示されるようにひらがなを見つけては読もうとし、読み方を大人に確認するようになった。

書く練習は、『なぞり書き』から『視写』に移そうとしたが、自分で書いて間違えることが心配なためか本児は抵抗した。初めて視写ができたのは11月中旬だった。なぞり書きと視写を平行して練習し、徐々に自信をつけていった。12月になるとひらがな清音がほぼまちがいをなく読めるようになった。この頃から「最近、A君と話が成り立つようになった気がするよ」という教師からの報告が増えた。

算数は、夏休み中も家庭でシールを使った3までの数の学習をほぼ毎日続けてもらった。その結果、連絡帳の8/31の報告のように夏休み明けには、3までの数が正しく数えられるようになっていた。9月からは、数を6まで増やした。サイコロやピンを6本使ったポーリングゲームができるようになり、楽しみながら繰り返し学習した。その場合に欠かせないのがシールはりで、これが児童Aの学習の動機になっている。児童Aはこの学習をたいへん好み、授業前からノートを出しては眺めたり、道具を準備して待っている。家庭でも同じようにサイコロやポーリングゲームやっては、シールを貼って楽しんでいる。児童Aの算数のノートはシールでいっぱいである。

(3) 3学期：発展に意欲を見せる

① 国語と算数の目標達成へ

国語は、苦手だった視写が何とか定着した。また視写のお手本として『文字スタンプ』を押ししたところ、児童Aが強く関心を示した。その後はこれがやりたくて、自分からスタンプの用意をしている。その日に書きたい単語があると、スタンプを並べて単語を作って待つようになった。児童Aの押したい単語を取り上げて練習をした。

児童Aの個別の指導計画

平成15年度 個別の指導計画

保護者	校長	教頭	教務	担任

作成年月日 平成15年 月 日

岡崎市立美合小学校

児童氏名	児童A	学年		性		生年月日	平成 年 月 日	作成者	安藤 仁史
------	-----	----	--	---	--	------	----------	-----	-------

A 学習

年間目標	学期ごとの目標	手立て・時期・場面・留意点	評価…◎, ○+, ○-, △
国語	A1 ひらがな46字(清音)と2~3単語の文が読めるようにする。	1 期 ひらがな(清音)30字が読める。2音節の単語(ねこ, いす, など)がいくつか語として読め, さしているものがわかる。	●読む練習 ・単語を読む。短文を読む。 ●書く練習 ・なぞりがき一筆順に従い, 一画ずつ区別して書く。 ・見て書く。
	2 期 ひらがな(清音)がほとんど読め, 3音節の単語(みかん, つくえ, など)が語として読め, さしているものがわかる。		
	3 期 濁音(が, ざ, ば, など)と, 半濁音(びぶべ)の一部が読める。		
	A2 形容詞の意味が, 10以上わかる。	1 期 色の名前を覚え, 名詞につけて使うことができる。「あかいりんご」など	●物事の状態を見て, 主語, 述語の整った簡単な文で表現する練習など。
		2 期 大きい, 小さい, 長い, 短いなどの形容詞の意味を覚え, 使うことができる。	
		3 期 きれい, きたない, 速い, 遅いなどの形容詞の意味を覚え, 使うことができる。	
算数	A3 10までの物の数が数えられるようにする。	1 期 3つまでの物の数が数えられる。	●具体物を指さしながら数えていくなど, 数の概念が持てるように, 生活の様々な場面で意図的に数える機会を作る。
		2 期 5つまでの物の数が数えられる。	
		3 期 10までの物の数が数えられる。	
	A4 時計に関心を持つようになる。	1 期 自分の一日の予定を意識して行動する。	●絵や写真を使った予定カード(時間割り)に従って行動する練習 ①順序を意識する。 ②予定の一部に時間をマッチさせる。
		2 期 自分の一日の予定を見て, 次は何をするか予想しながら行動するようになる。	
		3 期 自分の予定と時計を見比べて, その時間がきたら行動しようとする。	
音楽	A5 曲の中のごく一部でも, 正しい演奏方法で合奏に参加し, 演奏を楽しむことができる。	1 期 みんなと同じタイミングでカスタネットをたたいたり, 鍵盤ハーモニカの音を出そうとする。	●音楽(1年1組) ※補助員 ・出したい音から, 出さなければならぬ音へと促す。 ●3・4組ハンドベル演奏など
		2 期 曲に合わせてカスタネットをたたいたり, 鍵盤ハーモニカの1音か2音を出すことができる。	
		3 期 演奏することに興味を持ち, ごく簡単な曲を演奏しようとする。	
	A6 好きな曲2, 3曲を, 友達と一緒に楽しく歌える。	1 期 CDの演奏や友達が歌うのに合わせて, 歌を口ずさむことがある。	●音楽の授業(1年1組) ●歌に親しむ環境 ・朝の歌など
		2 期 CDの演奏や友達が歌うのに合わせて, 2, 3曲の一部を歌うことができる。	
		3 期 簡単な曲を, CDの演奏や友達が歌うのに合わせて一緒に歌うことができる。	

記録

〔評価〕 ◎…ひとりのできる, ○+…かんたんな声かけのできる ○-…手伝ってもらえばできる △…まだ学習(練習)中

連絡帳のやりとり（予定表やカードの使用に関して）

保＝保護者、担＝担任

5/13	保	運動会の日程を教えるため、カレンダーを作り、毎日寝る前にシールをはることにしました。
5/22	保	カレンダーにシールをはることに、ここ2、3日、興味を持ち出しました。お風呂からあがると、自分から「シールはる。」と言ってカレンダーを出し、「運動会だね。」と言って、25日を指さし（運動服を着ているAの絵がかいてあります）かたづけました。
5/23	担	予定表にシールをはったり色をぬるなどして、一日一日の時の流れが目に見えるようにするというのは、自閉の子にはとても効果があります。A君にはまだ一日という時間の単位は正確には伝わらないかもしれませんが、毎日、できれば決まった時（寝る前、登校前、時間割りをそろえるときなど）に確認してシールをはることを続けていけば、だんだん理解していくと思います。
5/26	保	カレンダーにきらきらのシールをはり、次の日に何とか信号を買うことができ、満足そうでした。
6/4	担	今は何をするときか、何をしてはいけないかがまだあいまいで、授業前に手を洗わせに行かせたら、そのまま3組教室にとんで行ってしまいました。「今は勉強するときだよ。したくないなら帰りなさい！」と言うと真剣に謝りますが、根本的な解決になっていません。いよいよ日課をカードで示さなければならなくなりました。
6/4	保	家でも「3組さん行くの？」と言います。気になるのでしょうか。カードの使い方をまた教えてください。
6/5	担	カードの使い方は、また作ったときに見ていただきます。
6/6	担	A君の場合、何が効果的かまだわかりませんが、予定を示すのは混乱状態を防ぐためです。今、何をしたいのか、どこへ行けばいいのか、よくわからない状態というのは、自閉の子は一般的に苦手なようですから、その道筋を示すことで、落ち着くという考え方です。どこかへ出かけるとき、予定がわかっていると効果があります。ただこれは人それぞれです。理解力にもよります。A君に合った方法を探っていかなければなりません。
6/8	保	父親と公園に行ったとき、弟のことを見ているすきにいたずらをしてしまいました。父親も反省していましたがちゃんと待てるようにもう一度厳しく教えようと改めて思いました。何かカードなども使ってみるべきか、新たな方法も必要かと思いました。
6/9	担	カードは万能ではないですが、試してみる価値はあります。ただ用意は大変ですよ。学校も作りました。またようすをお知らせします。
6/29	保	もうすぐ夏休みですが、どのように毎日を通そうか、今から頭を悩ませています。お勧めはありますか。
7/1	担	夏休みはみなさん共通の悩みですね。やってみる価値があるのが日課表です、お母さんも子どもの頃に経験があると思いますが、自閉の子には有効です。まだ文字の読みが不十分なので、絵や写真で示す必要があります。時計もまだなので、とりあえず順序を示す程度ですね。要は予定を示してあげるということです。内容は、お手伝い、学習、おえかき、アラール、ビデオ、おやつ作り、お出かけなど、レポーターがたくさんあるといいですね。私がここで書くほどたやすいものではないと思いますが、まずは一つの案として受けとってください。
7/1	保	日課表はぜひやってみようと思います。問題は内容ですね。まずはAに覚えさせたいお手伝いがあるので、それを入れることにします。また相談にのっていただけるとうれしいです。
7/17	保	夏休みの間もペースが崩れないよう、日課表を使って頑張りたいと思います。
7/18	担	夏休み、日課表を作ってどうなったか、また教えてください。私が言うのも何ですが、あまりがんばりすぎないようにしてくださいね。

連絡帳のやりとり（2学期 予定表やカードの利用に関して）

保＝保護者、担＝担任

8/31	保	休み中は、家にはってある予定表に興味を示し、課題が終わると自分で写真を裏にしています。
9/3	担	教室でも日課カードを復活しました。すると、私が言わなくても終わると真っ先に裏返していきます。これも家での習慣化の成果ですね。こうなってくるとカードを利用して情報が伝えやすくなります。
10/23	保	カレンダーの数字も読むようになりました。「今日は何日？」と聞くと、シールをはる所を「にじゅうさん」と言います。
10/24	保	カレンダーにシールをはる際、「明日は金曜日だから、もう一日学校に行ったらお休みだね。」と確認しています。すると学校から帰ってきた時、「明日～行く？」と自分から要求してきます。前日に言ったことを覚えているだけでしょうか。「休日」という認識ができてきたのかな、なんてうれしく思いました。
12/1	保	最近感じるのは、伝えておいたことをきちんと覚えているなということです。「明日は学校から帰ったら～の病院に行くよ。」と前日に伝えておいて、翌日予定変更すると、「今日、病院だね（＝だったよね）。」と確認してきました。ちゃんと覚えていることは多かったです、自分から実行したり確認したりできるようになりました。予定ということを意識するようになったのでしょうか。毎日の学校での予定表のおかげでしょうか。
12/2	担	予定というのは未来があることを意識すること、これは生活の中で繰り返す使用ことでしか覚えられないと思います。学校ではこれを意識的に教えています。家でもお母さんがよく声をかけ、確認されています。こういうことを繰り返した結果ではないでしょうか。予定表はA君にとってはとても大切なものになりました。私がうっかり朝、予定表を直すのを忘れると、A君に請求されます。ごめんごめん！とあわてて直すことがしばしばです。

連絡帳のやりとり（2学期の国語）

保…保護者、担…担任

10/2	担	字の練習は、一人で書くのは嫌がるので、なぞり書き以外は、当分手を添える必要がありそうです。手を添えれば安心するので、自分の意志で字を書こうとする気持ちが手の動きから伝わってきます。まずは画数の少ないひらがなから練習していきます。
10/16	担	ことばの意味を知らないと言うか、伝わらないあたかもどかしく感じる場合があります。劇のセリフ練習のときに「もっと大きくね。」と言っても伝わりません。「大きく」はどうやったら伝わるのか、考えてしまいます。
10/16	保	そうですね。特に抽象的な表現になると、どうやったら伝わるのだろうか悩んでしまいます。目に見えないことを表現するのは、難しいですね。「急いで！」と言っても、どうにも理解してくれないので、「走って」などと言い換えたり…。ジェスチャーや小道具を使って何とか伝わることもあるのですが、少しずつ教えていくしかないのでしょうか。
11/11	保	最近、物に字が書いてあると、自分から読もうとします。「れ・ん・ら・く・ち・ょ・う」などと、一字ずつ、確かめるように読んでいます。
12/5	担	ひらがな五十音は、ほぼ読めるようになりました。「わ・ね」「め・ぬ」は、間違えやすいです。五十音ブロックは、何も見なくても、「あ」から「ん」まで正しく並べられます。
12/7	保	この週末、文字を押すと、そのとおりの音を出すおもちゃにはまっていた。でも見ているとおもしろいですね。Aにはこんなふうに関心していたのかとわかります。「きいろ」が「きろ」、「がっこう」は「かこ」になり、発音も「じゃすこ」が「やすこ」で、教えてもややこしくて嫌みたいです。単語を自分で作れるようになったのがうれしいです。
12/8	担	A君の音の聞き取り方とか文字の読み方は、アバウトなところが多いです。「み」を見たら「みかん」と判断するようなもので、端々までいいねいに見る前に判断してしまいがちです。

連絡帳のやりとり（2学期の算数）

担＝担任、保＝保護者

8/31	保	3までの数が、ほぼ確実に1、2、3と数えられるようになったので、興味がわいてきて、色々な物（3つあるもの）を嬉しそうに数えています。最近、それ以上の物も数えていることがあります。
9/2	担	サイコロをふってシールをはる学習をやってみましたが、お手のものという感じですね。
9/9	担	算数の勉強はすごく楽しみにしていて、ノートを出して「赤にする」などと言っています。サイコロを転がしてやる方法はすっかりわかっていて、どんどん進めていきます。ただ確実に教えられるのは4まで。5になると、ちょっぴり怪しくなり、6に至っては、3まで数えて終了してしまいます。
9/9	保	家でも夏休みにやった算数の宿題をしたがり、時々おこなっています。3までしか確実ににはできませんが、目に入った物を何でも数えたがり、「…11、12…」と続けています。
9/24	保	家に帰ると、前の算数のノートを取り出して一生懸命シールを数えていました。おさらいでしょうか。
10/1	担	算数はピンを6個使ったボーリングです。床のシールに合わせて自分で並べて、その後でボールを転がします。倒れたピンだけを、教えたとおりに並べて数えます。同じ数のカードを指さした後、シールを張ります。ピンが1個しか倒れなかった時などは、手で残りを倒すというずるい技も使うので、その時はやり直します。机からノートを出しては眺めています。
10/23	保	最近、数字を書きたがるのですが、やはり手を添えるように要求します。つたないながらもほとんど自分で書いているのですが、久し振りにやったプラレールの工事現場のおじさんの人形に1～5まで番号が書いてあり、それを並べていました。どうしても6がほしいらしく「6、書いちゃう。」「自分で書いて。」と言います。紙に書かせると、いやいや書きました。形が崩れていましたが、6を書きました。納得いかないようで怒っていました。
10/24	担	少しずつ数に慣れてきて、そこから何かをしようとするのはうれしいですね。お母さんとのやりとりもいいですね。学校は「大きい・小さい」をやっています。同じ形（○と□）を比較して、繰り返し応えてもらっています。できたりできなかつたり、まだ半々です。
10/24	保	大小がわかるようにならないかと、ずっと前から願いつつ、機会があるたびに「どっちが大きい？」などとやってきました。数字のようにいつか理解できて興味をもってくれたらうれしいです。
11/8	保	「さんすうのクーピーでやる」と要求してきたので付き合いました。1から5まで色を決めて決まった色を塗るというふうにしてみました。（折り紙をのりでくっつけて長くしていた時に色のパターンを考えているようだったので試してみました。）1回目は少し抵抗していたのでまだ無理かな思ったのですが、今日も、自分から「1は赤のクーピーでやる」と言ってきたので、もう一度やってみました。はじめは私が「1は赤」「2は黄」などといちいち声をかけていたのですが、終わりの方には自分で言いながら、まあまあスムーズにできるようになりました。色や順番をあまりパターン化すると、それにこだわってしまうかなと思いはら変えてみましたが、終わりには抵抗なくできました。
11/10	担	算数のクーピーでの色塗りを学校でも試してみました。色はA君に聞きつつ、二人で決めました。（ここが大切。相手の要求を受け入れつつ、自分の要求を示す。そういうことを覚えてほしいです。）○をやったらもっとやりたがるので、今度は前と違うことを示すため、△にしました。しかも数字の順はバラバラとし、色も変えました。もちろん私の意見とA君の考えが半々です。いずれも抵抗なく楽しんでいました。時々、色をまちがえました。私が「あれえ！違ってるよ。直そうか。」と言って消しゴムで消すと塗り直していました。塗る時、クーピーをわしづかみにするので、鉛筆のように持たせました。こうしないと細かい指遣いができませんから。でもまだ手首が浮いてしまいますね。この学習から新しい学習や遊びが展開できるかもしれませんね。
11/10	保	色や数字、色々なものを覚えていくごとにレパートリーが増え、それらを組み合わせた勉強や遊びができるようになって楽しいですね。やり取りができるようになってうれしいです。座っていることさえ苦痛だった頃を思うと、夢のようです。「まず座って何かをすることが、楽しいと思えるようになるといいですね。」と心理の先生に言われたことが達成できてきたように思えます。

算数は、1月には10まで数えられるようになり、10本のピンを使ってボーリングが楽しめるようになった。その後も数への興味は尽きず、学校で学習をする前に1月中には10いくつ、2月には100近くまで数えられるようになっていった。

② 特技を生かしたカレンダー作り（2月）

カレンダーは、数字と曜日のスタンプを一つ一つ色画用紙に押しつけて作る。色画用紙は専用のフレームにはさんで固定する。フレームには、スタンプを押す場所がまちまちにならないように枠がある。子どもたちは、スタンプ台でインクをつけて、見本を見ながら決められたことを手伝ったが、じきに一人でできるようになった。この時点の本児は、すでに50近くまで数えられるようになっていたので、数字の順がわからなくなることはなかった。むしろその正確さは完璧に近く、友達が間違った判を押すと指摘する余裕すらあった。児童Aはカレンダー作りの時間を毎回楽しみにした。

IV. 指導の評価：1年間の指導を経て、指導を振りかえる

児童Aに課題を提示する時に効果的だったことは、

- ・順序が決まっていること（※特に数字を用いて表示するとわかりやすい）
 - ・目に見える形で、提示すること。その場合、どこに注目すればよいか明快感なこと
 - ・どれだけ（どこまで）やればいいのか（ゴール）が明らかであること
- であった。

国語や算数の学習をとおして字を覚え、数が数えられるようになるにつれて、課題を自分で確かめられるようになった。課題が読め、カレンダーの意味がわかるようになることは、自分の予定を把握したいと本児が望んでいたことと思われるが、連絡帳の10/24や12/1にあるように家庭での親子のやりとりが一層活発になり、保護者も喜んでいる。予定が把握できるようになったことは、交流の授業にもよい影響を及ぼした。一日の授業の予定を頭に入れている本児は、3学期になると、「音楽行く？」と言いながら、自分から教科書や楽器を用意し、協力学級の教室に出かけて行った。しかもさっさと自分の席に着いて授業を待っていた。給食や掃除など毎日繰り返す活動を覚えるためには、手順を決めて、練習の初期段階にはつききりで教えなければならぬが、ひとたび覚えてしまえば、作業が確実にできることがわかったようだ。しかも開始時期がくれば、指示がなくても始められる。練習どおりにやればよいので、失敗を恐れる児童Aでも安心して取り組めるようになったと思われる。

児童Aの保護者とは、毎日のお迎えの時の情報交換や連絡帳を使って意見交換等ができた。「今日はこれをしてみました。そうしたら児童Aはこんなふうでした。」「そうですか、それではこちらはこうしてみます。」といったやりとりが、ごく自然にできた。また、国語や算数のように児童Aのその時々興味関心を家庭と学校の両方で受け止め、具体的な支援が足並みを揃えてできた。

ひらがなを覚えて字が読めるようになったことと数が数えられるようになったことは、児童Aの行動や人との関わりに大きく影響した。文字や数字が児童Aと周りの人々とのコミュニケーションの道具として使えるようになり、児童Aは多くの情報を得るとともに、意志を伝えやすくなった。人をたたく行為が、3学期になってから激減した。

V. おわりに

本児は、この1年間で家庭や学校生活を中心に人との関わりがスムーズになった。この変化は、保護者の喜びにつながっている。とはいえ、まだまだコミュニケーションの方法は未熟で、思いを的確な表現で伝えていくには、今後もより適切なことばの使い方を指導していく必要がある。落ち着いて行動できるのも慣れた場所に限られるので、慣れない環境でも自制が効くような支援が必要ではないかと思われる。

保護者との連携に使用する個別の指導計画は、保護者とともに評価を共におこない、できるようになったことを確認することが、保護者の喜びにもつながった。しかし、目標の達成度は全体の60%くらいである。これは目標の立て方に問題があったことを示している。本児の実態に合わせた目標を考えるためにどのような観点でどのような目標をたてていくことがふさわしいのか、今後も検討を加えながら実践していきたい。